

『みんなの社会的処方 人のつながりで元気になれる地域をつくる』

西 智弘 編著

食料領域 上席主任研究官 小柴 有理江



孤独を感じる人が、社会との関係性を構築し、その中で居場所を見つけたり役割を発揮したりしていくことが、その人の健康に大きく貢献するということが明らかになりつつあります。本書は、医学的な立場などからそれを「社会的処方」として実践する著者らによって執筆されたものです。

本書の内容を紹介すると、まず、社会的処方とは、「薬で人を健康にするのではなく、人とまちとのつながりで人が元気になる仕組み」と定義されています。例えばパートナーを亡くして自宅に引きこもりがちな高齢者が「眠れない」と医療機関を受診した場合、医師が単に睡眠薬を処方したり日中の運動を勧めたりするだけではなく、その人の職歴や興味・関心事などを注意深く聞き取りし、社会的処方としてその分野の活動を行っている地域の団体を紹介し、そこでの居場所や活躍の場をつくることを通じて睡眠の問題も改善していくといった取組です。現代の医療を相補うものとして提起されています。

次にその展開や仕組みですが、社会的処方（Social Prescribing）はイギリスが発祥の地であり、世界各地で広がりをみせています。社会的処方は医師だけの取組ではなく、当事者と社会資源とをつなぐ立場の人が「リンクワーカー（コネクター）」として活躍します。イギリスの先進地域では、病院に所属する「ヘルスコネクター」に加え、地域の中で活動する「コミュニティコネクター」を養成し、多くの市民がコミュニティコネクターとして病院や社会資源とのつなぎ役となったり、当事者を受け入れたりしています。コミュニティコネクターの中には、「ヘリテージ（遺産）コネクター」、「グリーンコミュニティ（自然・環境）コネクター」、「デジタルコネクター」など、様々な分野のリンクワーカーが誕生しています。取り組む分野が多いと無秩序だと思われるかもしれませんが、様々な人が多様な形で関わることで、事情で病院を受診できない人や様々な支援からもれている人にもアクセスし、受け

入れることにつながります。多くの市民が関わることで地域の文化として根付いているそうです。

社会的処方は日本でも展開されています。政府の「経済財政運営と改革の基本方針（骨太方針）」（内閣府2022；2023）においても言及され、実践の場は保健・医療のほか、銭湯、アート、ダンスなどへと広がっているそうです。島根県雲南市のように農村政策で注目される地域でも実践されています。とりわけ森林や農地、水辺の環境を活用した社会的処方は、Green/Blue Social Prescribingと称され、社会的処方の発展形として国内外でその効果が期待されています。

最後に社会的処方の実践上欠かせない理念である「人間中心性」、「エンパワメント」、「共創」に触れたいと思います。当事者が心から喜びを感じたりその人らしさを発揮したりできる場に丁寧につなぎ、必要に応じてそうした場を当事者とともにつくり育てていくことの重要性です。加えて「支援」のあり方についても「支援する人（強者）」と「支援される人（弱者）」の関係性として固定するのではなく、並走、時には立場を逆転しながら両者が共に楽しむことで、無理のない形で取組が展開し、結果的に当事者の真の自立につながることが指摘されています。

本書は、年齢、性別や世帯構成に関わらず、「誰もが、等しくその生涯の中で、望まない孤立の状態に陥るリスクを負う」との問題意識に基づいています。他方で、社会的処方は、自身の得意分野を生かして様々な人が関与しうることが示されています。多様な人と多様な社会資源とをつなげることは現実には難しいと思われそうですが、社会資源に処方という新たな角度から光を当てつつ、コミュニティとして「育てる」ことで実現するものだと思います。このような社会的処方に少しでも関心を持たれた方は、まずは本書を手にとってみられることをお勧めします。

『みんなの社会的処方 人のつながりで元気になれる地域をつくる』
著者／西智弘 編著
出版年／2024年
発行所／学芸出版社